



「笑育 ～子育てってこんなに楽しい！～」 「上司が変われば日本の子育てが変わる！～イクボスのすすめ～」

平成 26 年 6 月 28 日 (土) 10:00～12:00 四日市市文化会館

■ 男性にとっての男女共同参画シンポジウム

平成 26 年 6 月 28 日(土)、四日市市文化会館において「男性にとっての男女共同参画シンポジウム」を開催しました。これは、NPO 法人ファザーリング・ジャパンが主催する「ファザーリング全国フォーラム in みえ」の分科会として、内閣府が主催したものです。

男性が働き方の見直しを進め、楽しく家事・育児に参画していくことをテーマに、森まさこ大臣（女性活力・子育て支援担当、内閣府特命担当（男女共同参画））のビデオメッセージで始まり、講演とパネルディスカッションの 2 本立てで実施しました。当日は、約 250 名の聴講者にお集まりいただきました。

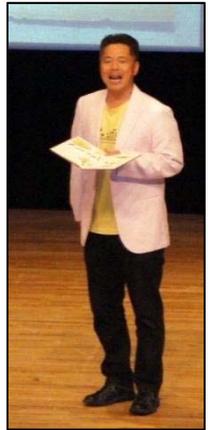
■ 第 1 部 講演「笑育、子育てってこんなに楽しい！」 講演者 NPO 法人パパジャングル 理事長 荒巻 仁さん

荒巻さんには、父親が笑顔でいることの大切さや子育ての楽しさを語っていただきました。

荒巻さんはご自身の子ども時代を「夢も希望も持たない子どもでした。」と振り返ります。長年、父親からの家族に対する暴力に耐え、「お母さんに心配をかけないように」「お父さんの機嫌をとるために」良い子の振りをして過ぎしてきました。夢も希望も持てない人生。「この人生で、自分は幸せになれないのではないか」、荒巻さんはそう感じながら大人になったと言います。

そして、親の支配の及ばない場所を求めて、27 歳で出家します。そして運命の出会い —— お寺での仕事を通じて、奥様と出会い、子どもを授かり、たくさんの本当の愛をもらいました。

その後、絵本の読み聞かせを通じて、地域の子どもたちの笑顔に出会ったときに、「自分のやりたかったこと」を遂に見つけます。暴力で苦しむ人たちの痛みを誰よりも知っているからこそ、『父親が笑っていることの大切さ』を伝えていく仕事、それが今の荒巻さんの父親としての日々であり、NPO 活動となっています。過去と現在とが 1 本の線でつながりました。



荒巻さんは言います、「今日が最後の日だったら、子どもとどのように向き合いますか。」と。「今日があなたの子どもと接する最後の日と思えば、笑顔で子どもと向き合おうでしょう。」荒巻さん自身、子どもと接する時はいつも笑顔で心がけていると言います。「楽しみながら子育てをしていくためには、自ら楽しもうと笑顔を大切にすることが重要です。そして、ご飯を作ってあげたい、抱きしめてあげたいといった感情を行動にしなが、子どもと接していくことが、「笑育」に取り組む秘訣なのだと思います。」

「父親自身が『笑顔』で子どもと接することで、子育ての楽しさや幸せを実感できるようになる」 —— 改めて認識することができました。

■ 第 2 部 パネルディスカッション「上司が変われば、日本の子育てが変わる！～イクボスのすすめ～」

コーディネーター	NPO 法人ファザーリング・ジャパン	副代表	安藤 哲也さん ● ※役職は当時のもの。
パネラー	広島県知事		湯崎 英彦さん ●
	日経 DUAL 編集長		羽生 祥子さん ●
	株式会社絵本ナビ 代表取締役社長		金柿 秀幸さん ●

コーディネーターとパネラー 4 人にご登壇いただき、それぞれの立場から、上司・仕事・職場と家事・育児参画を取り巻く課題などについて議論していただきました。

(1) イクボスとは

冒頭、安藤さんから、上司が率先して働き方の見直しを進め、家事・育児参画等を支援していく「イクボス」について、ご説明いただきました。

(安藤)「現在、共働きの核家族が増えてきており、夫婦で協力しながら子育てをしていく必要性が高まっています。一方、イクメンとして家事・育児に参画したいという男性も増えてきましたが、職場には、自分の仕事が終わっても帰りにくい職場の雰囲気があり、管理職や職場の上司にこうした働き方の見直しを進めてほしいといった声も大きくなってきています。こうした部下を支援する上司（イクボス）が増えていくことで、社員のワーク・ライフ・バランスの推進にとどまらず、社員の健康管理やロイヤリティの向上、そして、会社の生産性の向上につながっていきます。「イクボス」の推進は、社員、家族、会社、まさに、三方よしの取組なのです。」



(2) 自己紹介 ～イクボスとして取り組んできたこと～

まず、湯崎さんはご自身が育児休業を取得された理由と組織のトップが実行垂範することの重要性を次のように語ります。

(湯崎)「知事就任当初、議会で自らイクメンを実践すると宣言し、そのころ、私に3人目の子どもが生まれたこともあって、育児休業を取得しました。私の育児休業取得が報道され、PR効果を発揮したこともあって、広島県の男性の育児休業取得率は平成21年度では1.2%だったところ、平成24年度では7.2%になり、また、夫の一日当たりの育児時間は平成18年度では19分だったところ、平成23年度では53分となり、全国最下位から6位まで上昇しました。企業や組織のトップが実行垂範することは社内的にも対外的にも効果があります。」



また、イクメンを応援する環境づくりということで、『いきいきパパの育児奨励金制度』をつくりました。これは、中小企業の男性社員が1週間以上の育児休業を取得すると最大30万円の助成を行うものです。さらに、子育て世代を応援する店舗であることを示す『イクちゃんサービス』を展開したり、最近では企業のトップで『イクメン企業同盟』を結成して企業ぐるみでイクメンを応援していくこととしています。」

続いて羽生さんに、日経DUALを創刊した理由についてお話をいただきました。

(羽生)「日経DUALは2013年に創刊した日経グループの新規媒体です。私が8年前に初産をした際に、仕事と子育ての両立の分野はノウハウが伝達されていないと思い、情報共有のニーズを感じました。現在、インターネットで「日経DUAL」と検索すると、サイト上でコラムや情報を入手することができますし、フェイスブックやメールマガジンでの情報発信もしています。当初は女性の読者が多くなるのではと思っていましたが、実際には読者の約4割は男性です。女性のためだけでなく、働く男女のためのサイトを目指していきたいと思っています。」

金柿さんは、子どもの誕生を機に大企業から独立し、絵本ナビを立ち上げました。

(金柿)「絵本ナビは、インターネットで絵本の紹介と販売をしている会社です。市販の絵本を全ページ1回だけ試し読みができるサービスを提供しています。700万人超の方たちにご利用いただいています。以前、私は大手のシンクタンクで仕事をしていたのですが、非常にハードワークでこのままでは幸せな家庭は築けないと思いました。そこで、独立したのです。」



絵本ナビも、投資家から高い成長を期待されており、のんびりとしてられる訳ではありません。しかし、『ハードワーク、でも子どものためなら休める会社』を会社のビジョンに掲げています。イクメンは非常に大切なのですが、経営者としては業績も大切です。経営者の目線で、イクメン、イクボスの取組を考えていきたいと思っています。」

(3) イクボスになるために！

金柿さんに、起業当時を振り返ってご自身の経験をお話をいただきました。絵本ナビは14期連続で増収を続けています。



(金柿)「会社を立ち上げたときは、激務で会社に泊まり込む毎日でした。そのような中で、娘から「パパがおうちにいない」とSOSが出されます。元の会社を辞めても、結局、長時間労働をしていたのです。」

そこで、会社の組織を大きく変え、私自身が「一週間のうち、(土日も含めて)5日間は家族と夕食を食べる」と決めました。うまく業務が回るように、締切日から逆算した前倒しスケジュール、ITでクラウドとモバイルを最大限使って会議時間の縮小に取り組みました。「決められた時間の中で、全員が全力投球する」というルールにしています。」

(湯崎)「“通常残業省”とも揶揄される(笑) 通商産業省に僕がいたころ、夜中の2、3時まで働いて、翌朝は9時半に仕事がスタート、土曜日から海外出張して日曜日に帰宅し、月曜日から通常業務といった働き方をしていました。しかも、それをカッコイイと思っていた時期もあります。そんな働き方を変えるには自分自身で気づくことが大事なのだと思います。そして、それを評価してくれるイクボスが必要だと思いますね。」

金柿さんも、ハードワークをカッコイイと思っていたといいます。

(金柿)「私も、倒れるまで働くのがカッコイイと思っていました。しかし、ワーク・ライフ・バランスの講演会で日本人の単位時間当たりの労働生産性が先進国の中で19年連続最下位だと知りました。もっと緩やかに働いて家庭を大事にしているイメージがあるイタリア人のほうが生産性はずっと高い。「なんだ、結局、僕達が家庭を犠牲にしなくてはならなかったのは、やり方が下手だったからなんだ。」と気づき、発想を転換しました。」

(安藤)「私も出張でドイツに行った際、5時になると皆さん帰っていく。でも、ドイツの経済は絶好調です。日本と同じ自動車などの製造業を抱えている国なのに、なぜ彼らは早く帰れて私たちは帰れないのか、疑問を感じました。」

(金柿)「ママスタッフが組織に入ると、職場が変わるきっかけになります。ママスタッフには必ず子どものお迎えの時間がある。夜は無限に時間があると思って雑談をしている男性に比べて仕事のスピードははるかに速いです。」

羽生さんからは、効率の良い働き方ができる職場にするために、提案をいただきました。

(羽生)「職場でライフの情報をもっと共有してもいいのでは?と思います。子どもがいると、病気の子どもの世話やPTAなどの保護者会…と仕事とは別の予定が増えます。そのようなときに職場のチームメンバーに『取引先直帰』などと嘘をつくのはいくつか、子どもがいる人生を否定しているのと同じでこういった働き方は続きません。ボス自らライフの予定を職場で共有すれば、部下もそれに続きます。ボスはさらに上の上司に、部下達の活躍と実績やプランを明確にして伝えることも重要です。時間に制約がある部下を持っていても、高い生産性と実績を示すことができれば、意思決定層の顔色が変わっていくはず。そして、そういう働き方ができていたり仕事を交代してくれた男性に対しては、激しく感謝したり褒めることが大切だと思います。」

(4) イクボスを増やしていこう!

部下のモチベーションを上げ、効率の良い働き方で組織マネジメントができる「イクボス」を増やしていくために必要なことは何でしょうか

(金柿)「イクメンを支援するために一部を修正するといった表面的な方向転換では、組織は変わりません。組織のOSを入れ替えることが重要です。トップは、持続的に高い成果を上げていくための『経営戦略』として位置付けることが大切です。」湯崎さんも、トップが変わること、そして、社会が変わることの必要性を訴えます。

(湯崎)「組織の風土を変えていく必要があるので、まずトップが動く必要があります。そして、実は女性の問題でもあります。私が育児休業を取得した際に女性からも否定的なご意見をいただきました。男性の家事・育児参画についてもご理解をいただきたいと思います。企業のトップの意識が変わると同時に、社会全体の意識も変わる必要があると感じています。」羽生さんは、加えて夫婦で話し合うことの大切さを指摘されます。

(羽生)「まず家庭内を変えていくことが大切だと思います。お父さんは稼ぐ人、お母さんは家庭を守る人という固定役割が根強く残っているように思います。そういう中でお母さんがパートに出ようとすると、お父さんが「ちゃんと家庭のことはやってから出ろよ」と言う。家事を平等にまでとはいかないかもしれないが、お父さんもできることはすることが大切。お母さんも、感情的にならずに、夫婦で冷静になって、家族の決算を数字で示して中期的な計画を立てていくべきだと思います。子どもはよく見ています。両親はロールモデルですから。



今はイクボスになりたがっている管理職も増えてきました。新入社員に向けたある調査でも、今や7割以上が共働きをしたいと思っています。そんな若くて優秀な人材のマインドをイクボスならグリップできるはず。金柿さんは、改めて働き方の見直しについて念を押します。

(金柿)「12時間かかる仕事を8時間でやり遂げましょうと言っている訳です。現状では、12時間かけた方が、頑張っていると評価されたり、残業手当も付いたりして利点があるのです。しかし、このような働き方では、イノベーションは決して起こりません。」

(安藤)「この変化の激しい時代に、仕事でパソコンに向かうことだけやっていたら、いい仕事はできません。私は、皿洗いをしている時にアイデアがひらめくことも多いです。」

働き方の見直しを進めるために、人事評価のあり方にも触れられます。

(羽生)「人事の評価軸に、イクボスの視点を加えるのも一つの手。せっかく育成した社員が、出産や育児を機に会社を辞めてしまうなど、企業にとっては打撃です。育休を取得した後に、第一線に戻って来てもらうためにはこういった人事の仕組みをつくることも重要です。そして、育児だけではなく、介護にも対応できることになると思います。」

働き方の見直しを進めた上で、職場でもらったエネルギーを家庭で活かしていくという循環について、お話しされます。

(羽生)「職場がエネルギーを吸い取る場であってはいけないと思います。職場はエネルギーをもらえる場にしたいと思います。また、子どもと平日に過ごすのは忙しくて無理とわかっていても、人生全体で見るとその時間は数%です。子育ての幸せは、日払いなのだと思います。うっかり子どもとの時間を削除していると、その楽しみを味わうことなく終わってしまうことをお伝えしていきたいです。」

最後に、どの企業・組織もトップの行動次第で変革を起こせると指摘されます。

(湯崎)「中小企業ではそんなことできない、というのは嘘ですよ。先ほど、『いきいきパパの育休奨励金制度』のお話をしましたが、その助成対象企業の中には、社員15人規模の中小企業もある。トップの心の問題です。新しい働き方ができないというのは思い込みです。」

「トップが意識を変えれば、働き方は変えられる」——自らも仕事と子育てに全力投球し、部下をマネジメントして実績を上げているイクボス達から、力強いエールをいただきました。



左から順に、金柿さん、湯崎さん、羽生さん、安藤さん